

(6 月 29 日)「詩編 75 : 9～11」

すでに杯は主の御手にあり 調合された酒が泡立っています。主はこれを注がれます。この地の逆らう者は皆、それを飲み おりまで飲み干すでしょう。

(詩編 75 編 9 節)

・昨日の箇所には、驕る者は神さまの裁きを受けるということが書かれていました。人は驕るときに、自分を高く上げます。すると相対的に神さまは下におろされてしまうのです。その行為を聖書では、「傲慢」と呼ぶのです。

・神さまの手には、杯があります。この杯は「この地の逆らう者」に対して飲まされるものです。杯の中身は、それぞれの人の運命だという説明がありましたが、裁きの杯という意味も強いでしょう。

・本来わたしたちも、この杯を飲まなければならなかった一人ひとりです。しかしイエス様はゲツセマネの園の祈りの中で、ご自分の杯を受け入れられました(ルカ 22 : 42)。そしてそのときイエス様は、わたしたちの杯も一緒に、飲まれたのです。

(6 月 30 日)「詩編 76 : 1～7」

そこにおいて、神は弓と火の矢を砕き 盾と剣を、そして戦いを砕かれる。

(詩編 76 編 4 節)

・「イスラエルを救う主の怒り」：シオンの歌です。3 節にある「サレム」とはエルサレムの古代名であり、「平和」という意味を持ちます。「エル」とは「神」のことですから、「エルサレム」は、「神の平和」となるのです。

・神さまは弓と火の矢、盾と剣、そして戦いを砕かれます。兵器を粉碎することによって、シオンに平和の都エルサレムを作られたのです。力で制圧するのではなく、戦いそのものが成り立たないようにされたのです。

・聖歌 513 番の一節にこのようにあります。「主よわが身を とらえたまえさらばわが心 解き放たれん わが剣を くだきたまえさらばわが仇に打ち勝つをえん」。わたしの剣も、砕かれる必要があります。本当の平和は、そこから始まるのです。

詩 編 通 読

6 月



(6月 1日)「詩編 67 編」

大地は作物を実らせました。神、わたしたちの神が わたしたちを祝福してくださいように。

(詩編 67 編 7 節)

・「豊作を求める祈り」：祝福を求める共同体の歌です。聖公会では礼拝の最後などで、「父と子と聖霊なる全能の神の恵みが、常に皆さんとともにありますように」という祝福をすることがあります。

・教派によってはその祈りではなく、「アロンの祝福」と呼ばれるお祈りを用いることがあります。民数記 6 章 24～26 節にあるお祈りですが、詩編 67 編 2 節はその祈りが用いられていると考えられています。

・民が祝福された喜びを、この詩編は歌っていきます。そして祝福を受けたわたしたちは、「ハレルヤ！」とみ神をたたえるのです。聖歌 321 番「ものみなこぞりて み神をたたえよ」を心から歌いたいと思います。

(6月 2日)「詩編 68 : 1～5」

神に向かって歌え、御名をほめ歌え。雲を駆って進む方に道を備えよ。その名を主と呼ぶ方の御前に喜び勇め。

(詩編 68 編 5 節)

・「主の凱進行列」：神の勝利と支配です。この詩編はイスラエルの民を率いた主が戦いを経て、聖所へと向かう様子が語られたものです。まるで絵巻物のようにその様子が伝えられています。しかし同時に、全詩編の中で一番意味が分かりにくいという評価もあります。

・出エジプト記 15 章には、「海の歌」というモーセの歌が載せられています。エジプトを無事に出ることができた感謝を、神さまにささげる歌です。この詩編は海の歌と類似していると言われます。

・「雲を駆って進む方 (5 節)」という表現があります。エジプトを出る際、主なる神さまは、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって民を導きました。その救いのシナリオが、スタートしていくのです。

(6月 27日)「詩編 74 : 18～23」

あなたに刃向かう者のあげる声 あなたに立ち向かう者の常に起こす騒ぎをどうか、決して忘れないでください。

(詩編 74 編 23 節)

・作者は神殿がなくなった今、嘲る敵の手から早く救ってくれるようにと願います。19 節に「あなたの鳩の魂を獣に渡さないでください」という言葉があります。ここでの鳩は、イスラエルを意味しています。

・鳩は旧約聖書のノアの箱舟の物語の中に出てきます。神さまが起こした洪水によって、地上のものはすべて水の中に沈みます。箱舟に乗ったノアは地表が乾いているのを確かめるため、鳩を窓から放ちます。

・鳩は二度目に、オリーブの葉をくわえて帰ってきました。それがノアたちにとって、新しい始まりのしるしでした。神殿がなかったとしても、新たな心で神さまのみ名を賛美することができるよう、そうわたしたちも願いたいと思います。

(6月 28日)「詩編 75 : 1～8」

地はそこに住むすべてのものと共に 溶け去ろうとしている。しかし、わたしは自ら地の柱を固める。

(詩編 75 編 4 節)

・「全世界の審判者である神」：この詩はいろいろな類型が混ざっていると言われています。この詩の 2 節は会衆の賛美です。「あなたに感謝をささげます」と繰り返しながら賛美する。わたしたちもそうなりたいものです。

・3 節以降は神さまの語りや警告が書かれていますが、一番強く言われているのは「驕(おご)るな」ということです。「驕れる者久しからず ただ春の夜の夢の如し」という平家物語の冒頭を思い出します。

・「驕る」とは、地位・権力・財産・才能などを誇って、思い上がった振る舞いをするということです。自分を誇り、自分の力に頼り、自らを高くすることです。そのような人は、神さまの裁きを受けるということでしょうか。

(6月 25日)「詩編 74 : 1~11」

わたしたちのためのしるしは見えません。今は預言者もいません。いつまで続くのかを知る者もありません。

(詩編 74 編 9 節)

- ・「神殿破壊後の嘆願」：救いを求める共同体の祈りです。この詩は捕囚期（バビロンにイスラエルの人々が連れて行かれた時期）のエルサレムにおいて、破壊されたエルサレム神殿をしのんでいるのではないかとも思われています。
- ・この詩の作者は神殿が破壊される描写を通して、神さまが自分たちを見捨てられたという思いを伝えているようです。そして 3~7 節は、荒れ果てた聖所でその後、繰り返し祈られていったと言われています。
- ・ユダヤの人たちにとって、神殿は絶対的なものでした。神殿に民が集まり、祈りをささげることがユダヤ人としてのアイデンティティを保つことでした。しかし神殿の崩壊は、イエス様も予告されていたことだったのです。

(6月 26日)「詩編 74 : 12~17」

あなたは、太陽と光を放つ物を備えられました。昼はあなたのもの、そして夜もあなたのものです。

(詩編 74 編 16 節)

- ・今日の箇所では、神さまのみ業をほめたたえます。神さまは世界の秩序を確立しました。その様子は創世記の初めに書かれていますが、無秩序で混沌としたところに様々なものを創造されたのです。
- ・レビヤタンは旧約聖書に出てくる海の怪物で、7 つの頭を持つ蛇とも言われます。そのようなものも支配され、この世界を整えられた神さま。しかし今神殿が壊され、わたしたちが窮地に立たされているのは何故ですかと神さまに向かって声をあげるのです。
- ・しかしイエス様が十字架の死から復活されたように、建物としての神殿が壊れたとしても、本当の神の宮はわたしたちの中にあるのです。「目に見える物」に固執し続ける必要はないのです。

(6月 3日)「詩編 68 : 6~9」

神は孤独な人に身を寄せる家を与え 捕われ人を導き出して清い所に住ませてくださる。背く者は焼けつく地に住まねばならない。(詩編 68 編 7 節)

- ・6~7 節には、よるべない者を助けられる神さまの姿が描かれます。「よるべない」とは、寄る辺のない、身を寄せるあてがない、頼りにできる類縁の者がいない、孤独であり不安である、という意味です。
- ・神さまは孤独の中、助けを求める人を導いてくださいます。その人たちが平安に過ごせる場所を与えてくださるのです。神の国とは神さまの支配という意味です。誰かにすぎるしかない人が平安に生きることができる場所、それが神の国なのでしょう。
- ・その神の国が、争いなどで土地を奪う必要もなく、わたしたちの中にすでにやって来ているというのがイエス様の教えです。そしてわたしたちも聖なる宮に組み込まれ、そこに住むことが許されているのです。

(6月 4日)「詩編 68 : 10~15」

主は約束をお与えになり 大勢の女たちが良い知らせを告げる

(詩編 68 編 12 節)

- ・昨日読まれた 8 節から今日の 15 節までの中に、様々なことが書かれています。まず 11 節までには、神さまのみ姿がどのように人々に知られるようになったのか書かれています。10 節には「あなたは豊かに雨を賜り」とあります。
- ・6 月に入り、梅雨の時期が近づいてきました。もしかするとすでに入っているかもしれません。梅雨になると草花は元気になり、公園の鹿たちもうれしそうです。イスラエルは乾燥地帯ですので、雨の恵みはわたしたち以上に感じるでしょう。
- ・雨によって地を再生させることを、「約束の地」に入る理由にもしているようです。今日の箇所の後半には約束の地に入る戦いや、勝利して土地を得る場面が描かれます。ただ「争い」による取得は、わたしたちにとっては違和感のあるところですが。

(6月 5日)「詩編 68 : 16～19」

主よ、神よ あなたは高い天に上り、人々をとりこし 人々を貢ぎ物として取り、背く者も取られる。彼らはそこに住み着させられる。

(詩編 68 編 19 節)

- ・凱旋パレードに行かれたことはあるでしょうか。といってもわたしたちの身近では、スポーツなどで好成績をあげたチームなどがおこなうことが多いようです。昨年は横浜 DeNA ベイスターズがパレードしていました。(中日ドラゴンズのパレードはいつの日か)
- ・聖書の時代の凱旋パレードは、ほぼ戦争に関係しています。「神の戦車は幾千、幾万 主はそのただ中にいます」とあるように、人々はその「勝利者」をほめたたえ、歓喜の声をあげるのです。
- ・主が凱旋することによって、その場所は「神のいます場所」となります。主はこうして、エルサレムを神の住まいとされました。しかしその場所は、今も争いの火種になっています。本当にそこに神はいるのでしょうか。

(6月 6日)「詩編 68 : 20～28」

聖歌隊によって神をたたえよ イスラエルの源からの主を。

(詩編 68 編 27 節)

- ・いよいよ神の勝利の行進です。旧約聖書には契約の箱が幕屋に運ばれたという記述がありますが、そのようなことをイメージすればいいと思います。さて聖公会では、2006 年に新しい聖歌集が発行されました。
- ・それまでは「古今聖歌集」が使われていましたが、そこにはあつたけれども新しい聖歌集には入れられなかった曲もあります。「立てよいざ立て主のつわもの」や「みよや十字の旗高し」が有名なところです。
- ・いずれの曲も「神の勝利」をイメージして歌われているものですが、あまりにも「戦い」が表に出ているので選ばれなかったのだと思います。しかしあくまでも「主の戦い」であって、実際のものとは違うことも覚えておきましょう。たまに歌いたくなります。

(6月 23日)「詩編 73 : 18～22」

わたしは愚かで知識がなく あなたに対して獣のようにふるまっていた。

(詩編 73 編 22 節)

- ・この 18～22 節では、悪人が滅ぼされる場面が書かれます。昨日の最後の節で作者は、聖所で悪人の行く末を黙想しました。そこで示されたイメージが、今日の箇所だということでしょうか。
- ・「勸善懲悪」、言葉にすれば簡単ですし、映画やドラマでもこのような筋書きだとスッキリします。しかしそれは、あくまでも自分が「善」であるという中での話です。でもどうでしょうか。わたしたちは本当に「善」なのでしょうか。
- ・作者は自分が、神さまの前に愚かな獣に成り下がっていたことを告白します。ヨブ記の最後にも見られることですが、神さまの前に弱く欠けの多い自分を知ることとは、とても大切なことです。そしてこの告白によって、わたしたちの心にも平安が訪れるのです。

(6月 24日)「詩編 73 : 23～28」

わたしは、神に近くあることを幸いとし 主なる神に避けどころを置く。わたしは御業をことごとく語り伝えよう。

(詩編 73 編 28 節)

- ・心に平安を得た作者は、神さまに対する敬虔な熱い思いを歌います。神さまが自分の右の手を取って下さるというイメージには、すごく温かいものを感じます。「手を差し伸べて下さる神さま」、わたしたちもその手を握りかえたいものです。
- ・神さまは必ずわたしを受け入れてくださる、24 節にある言葉こそ、作者の強い思いです。そして「神に近くある」ことに気づかされます。これが本当のシャローム（平安）です。平安は他でもない、自分の中にあつたのです。
- ・信仰に戸惑い、疑いながら歩む中で、自分の手を取り導いてくださる神さまの姿を知る。このことこそ、わたしたちの信仰の中で何度も訪れることです。信仰に悩むときには、この詩編 73 編を読み返しましょう。

(6月 21日)「詩編 73 : 1~12」

神に逆らう者の安泰を見て わたしは驕る者をうらやんだ。

(詩編 73 編 3 節)

・「信仰の勝利」:今日の詩編 73 編から、第三巻に入ります。この詩は賛歌で、アサフの詩だと書かれています。アサフはイスラエルの歴史の中でも屈指の賛美指導者であったと言われています。

・この詩編 73 編は、多くの人たちに愛されてきました。というのも様々な苦悩を正直に書き、神さまから離れようとする心を引き戻してくれるからです。わたしたちの現実ともリンクしていくのです。

・3 節に「神に逆らう者の安泰を見て...うらやんだ」とあります。安泰とは、シャローム (平安) のことです。心の清い人に恵みを与えてくださるはずが、なぜ悪人に対して！と憤る作者の嘆きが聞こえてきそうです。

(6月 22日)「詩編 73 : 13~17」

「彼らのように語ろう」と望んだなら 見よ、あなたの子らの代を 裏切る
ことになっていたであろう。

(詩編 73 編 15 節)

・心を清く保とうとも、手を洗って潔白を示そうとも、作者は空しさを感じます。そこには信仰に対する疑いが出て来たのでしょう。わたしたちも心に戸惑いがある中で表面的に祈っても、心が伴わないことがあります。

・「悪人がシャローム (平安) の中にいる」と作者は昨日の箇所で嘆きます。彼らのように振る舞えば、どんなに楽だろうか。そういう思いが芽ばえながらも、彼は必死にとどまります。

・そして神の聖所で、悪人の行く末を考え、黙想するのです。何だかとても怖い気がします。自分のことだけをしっかりと考えたらいいのにも思います。「毒麦も育つままにしないで」というイエス様の言葉が心に響きます。

(6月 7日)「詩編 68 : 29~36」

神よ、あなたは聖所にいまし、恐るべき方。イスラエルの神は御自分の民に
力と権威を賜る。神をたたえよ。

(詩編 68 編 36 節)

・68 編も今日が最後です。今日の箇所では前半で礼拝者が神さまのみ力を祈り、後半では神さまによる統治をほめ歌います。イスラエルの人々にとって、エジプトから神さまが逃れさせてくれたということは、永遠に語り続けるべきことなのです。

・日本でいえば、日本書紀や古事記のようなものでしょうか。ただわたし自身も、その内容を詳しく知っているわけではありません。ネットでその内容を見ても、何が書かれているのかよく分からないのが現実です。

・イスラエルの人たちは、出エジプトの出来事を家族に伝えていきました。父から子たちへ、必ず伝えるものとして、大切にしてきたわけです。内容には偏りがあるものの、その信仰と自分たちのアイデンティティを守ろうとする姿勢には頭が下がります。

(6月 8日)「詩編 69 : 1~5」

理由もなくわたしを憎む者は この頭の髪よりも数多く いわれなくわたし
に敵意を抱く者 滅ぼそうとする者は力を増して行きます。わたしは自分が
奪わなかったものすら 償わねばなりません。

(詩編 69 編 5 節)

・「悩める僕の嘆願」:救いを求める祈りです。この詩編は詩編第 22 編とよく似ていると言われています。そのためイエス様の受難を覚えて読むこともあります。聖公会でも、復活前水曜日や受苦日に選べるようになっています。

・苦しみの中で作者は、神さまの助けを待ち望みます。彼には頼るものがなく、死の力に苦しめられています。詩編に出てくる大水や深い沼という言葉は、死を思い起こさせる隠喩表現になっています。

・詩編 22 編も「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という神さまの不在を嘆く言葉から始まります。イエス様も十字架上で、その詩編を引用されました。そこに神はいるのでしょうか。

(6月 9日)「詩編 69 : 6～13」

あなたの神殿に対する熱情が わたしを食い尽くしているので あなたを嘲る者の嘲りが わたしの上にふりかかっています。

(詩編 69 編 10 節)

・先日天に召されたローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇は、2018年3月4日の「お告げの祈り」でこう言っています。「この詩編は、敵対者の憎悪によるきわめて危険な事態にあって助けを請い求める祈りです」と。

・この詩編とは、詩編 69 編 10 節の「あなたの神殿に対する熱情が わたしを食い尽くしている」という箇所のことです。イエス様が神殿から商人を追い出した記事の中でも、この箇所を弟子たちが思い起こす記述がありました(ヨハネ 2 : 17)。

・神殿での熱心な祈りが実を結ばない。断食しても、粗布を身にまとっても、嘲られ、侮辱されている。しかし正しい者に、神さまは必ず目を向けてくださるのです。そのことをわたしたちも信じていきたいと思います。

(6月 10日)「詩編 69 : 14～19」

泥沼にはまり込んだままにならないように わたしを助け出してください。
わたしを憎む者から 大水の深い底から助け出してください

(詩編 69 編 15 節)

・作者は「御顔をわたしに向けてください」と祈ります。旧約の時代、神さまの顔を見てしまうと死んでしまうと思われていました。神さまのみ使いや天使であっても、同じだと考えられていました。

・しかし顔と顔を合わさないまでも、神さま、こちらを向いてくださいよというのが彼の祈りなのでしょう。以前、ある修養会で、イエス様のまなざしについてイメージの分かち合いをしたことがあります。

・弟子として漁師を招かれたとき、ペトロに「退けサタン」と言われたとき、ゲツセマネの園で眠る弟子たちを見るまなざし、そして三度イエス様を知らないと言ったペトロを見る目。御顔を向けたイエス様は、どのようなまなざしで彼らを見ていたのでしょうか。

(6月 19日)「詩編 72 : 8～15」

王が命を得ますように。彼にシェバの黄金がささげられますように。彼のために人々が常に祈り 絶え間なく彼を祝福しますように。

(詩編 72 編 15 節)

・この詩の作者とされるソロモンは神さまに夢の中で、「願い事があれば、言いなさい。かなえてあげよう」と言われます。みなさんだったら何を願いますが。宝くじがあたること？家族の健康？

・ソロモンはそのとき、「聞き分ける心を与え(列王記上 3 : 9)」るように願います。そのソロモンの願いは、神さまの目に適いました。そして神さまはソロモンに、「知恵に満ちた聡明な心」をお与えになったのです。

・その名声は広く知れ渡り、シェバ(エチオピア)の女王がソロモンを試すためにやってきます(列王記上 10 : 1～13)。しかしその知恵に驚いた女王はソロモンに、たくさんの贈り物をします。この詩編の 15 節に書いてあるのは、そのことを意味しているようです。

(6月 20日)「詩編 72 : 16～20」

栄光に輝く御名をとこしえにたたえよ 栄光は全地を満たす。アーメン、アーメン。

(詩編 72 編 19 節)

・民は王のために祈ります。それは王といえども人間なので、失敗をしたり罪を犯したりすることもあるからです。ダビデはウリヤの妻バト・シェバを自分のものにするために、ウリヤを戦場の最前線に送って殺してしまいました。

・ソロモンは多くの外国人の女性を愛し、神さまから「彼らと結婚してはならない」と命じられていたにもかかわらず、700人の王妃と300人の側室を持ちました。そのような「主の目に悪とされること」を、人間は繰り返してしまうのです。

・この詩編 72 編をもって、第二巻は終わります。18～19 節の祈りが、そのしるしとなります。ダビデを中心とした祈りはここまでです。明日の 73 編からは、アサフの詩が多く登場します。どのような特徴があるのでしょうか。お楽しみに。

(6月 17 日)「詩編 71 : 16～24」

わたしが老いて白髪になっても 神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を 来るべき世代に語り伝えさせてください。

(詩編 71 編 18 節)

・「わたしが老いて白髪になっても」と作者は書きます。人間社会の中では、年を取るとできることが限られ、自分は役に立たないのではないかと考えてしまう人がいます。確かに若い頃のようにには動けないでしょう。

・そしてこう言われるのです。「もう、祈ることしかできなくて」と。いやいや、と思います。「祈ること」が一番大切なことだからです。教会とその交わりの中で、必要ない人など存在しないのです。

・「神さまは必ず祈りを聞き、わたしを用いてくださる」、その信頼の中で、歩いていきましょう。そしてその思いを、次の世代にも伝えていくのです。それこそ白髪になって初めて、できることなのかもしれません。

(6月 18 日)「詩編 72 : 1～7」

王が民を、この貧しい人々を治め 乏しい人の子らを救い 虐げる者を碎きますように。

(詩編 72 編 4 節)

・「平和の国の永遠の王」：油注がれた王のための祈りです。この詩編は、王の即位式のときに用いられたと考えられています。イスラエルの王は初代サウル、二代目ダビデ、三代目ソロモンでした。

・この詩は「ソロモンの詩」と書かれています。ソロモンが王だった時代、イスラエルは一番栄えていました。そもそもイスラエルは長い間、王を任命してきませんでした。それは本当の王は、神さまだと考えていたからでした。

・しかし民の願いにより、神さまはイスラエルに王を立てることを聞き入れます(サムエル記上 8 : 22)。そして王のために神さまにして欲しいこと、また民のために王にして欲しいことを人々は願っていくのです。

(6月 11 日)「詩編 69 : 20～29」

人はわたしに苦いものを食べさせようとし 渴くわたしに酢を飲ませようとし します。

(詩編 69 編 22 節)

・エレミヤ書 8 章 14 節に、このような言葉があります。「何のために我々は座っているのか。集まって、城塞に逃れ、黙ってそこにいよう。我々の神、主が我々を黙らせ 毒の水を飲ませられる。我々が主に罪を犯したからだ。」

・22 節の「苦いもの」や「酢」は、激しい痛みや苦しみを与えるものです。この場面では主ではなく人によって、そのような目に遭っているのだと作者は訴えます。この作者もまた、打たれているのです。

・そして作者は、敵対する人に対する“裁き”を神さまに訴えます。「命の書」とは、この地上に誕生したすべての人の名が書き記されたものです。そこから抹殺(抹消)されるということは、永遠の命をはく奪されるということです。とても厳しいですね。

(6月 12 日)「詩編 69 : 30～34」

神の御名を賛美してわたしは歌い 御名を告白して、神をあがめます。

(詩編 69 編 31 節)

・「われら主を たたえまし 聖きみ名 あがめばや 来る日ごと ほめ歌わん 神にまし王にます 主のみいつ たぐいなし」、これは聖歌 317 番の 1 節の歌詞です。わたしたちはいつも、主を賛美しようということです。

・ではわたしたちは誰のために主に賛美するのでしょうか。一義的には、自分のためなのでしょう。しかし 33、34 節にあるように、今、貧しい人や乏しい人にとっても、「神さまが苦しむ人の声に耳を傾けてくださる」ということが希望につながっていくのです。

・わたしたちの祈りは、わたしたちに関わる人たちや地域の人たち、また世界の人たちや祈ることの出来ない人たちの分まで、一緒になされます。だから聖公会では「代祷」と呼ぶのです。「代わりに祈る」、「代表して祈る」中で、その誰かを思いながら祈るのです。

(6月13日)「詩編 69 : 35～37」

神は必ずシオンを救い ユダの町々を再建してくださる。彼らはその地に住み、その地を継ぐ。
(詩編 69 編 36 節)

・ほぼ一週間にわたって読んだ詩編 69 編も、今日が最後です。今日の詩編の中には、シオンとユダという地名が出てきます。そしてそこが救われ、再建されるという記述を見ると、「この詩編は読むべきではない」と声をあげる人たちがいます。

・シオンとはエルサレムのこと、またユダの町々は様々な外敵によって奪われていった場所です。ただどちらの場所も、歴史的には様々な“所有者”があり、それぞれが自分たちの権利を主張しているともいえます。

・詩編を読むときに大切なのは、シオンやユダなどという地名が出て来たときに、現在のイスラエルやエルサレムと同一視しないということです。この世のものではない「新しいエルサレム」を思い、祈ることが必要なのではないのでしょうか。

(6月14日)「詩編 70 編」

神よ、わたしは貧しく、身を屈めています。速やかにわたしを訪れてください。あなたはわたしの助け、わたしの逃げ場。主よ、遅れないでください。
(詩編 70 編 6 節)

・「助けを求める祈り」：救いを求める個人の祈りです。表題にある「記念」とは、レビ記にあるささげ物のやり方の記述、「祭司はこの穀物の献げ物から一部を取り分け、しるしとして祭壇で燃やして煙にする (レビ 2 : 9)」の中の「しるし」です。

・この詩はほぼ全体が、願いで構成されています。作者は屈辱を受けていました。4 節は口語訳聖書ではこのように書かれていました。「『あはあ、あはあ』と言う者どもを 自分の恥によって恐れおののかせてください」。

・その屈辱の中で、自分は貧しく、身を屈めるしかないことを作者は神さまに伝えます。神さまに依存するしかないのです。そのような思いの中で祈る言葉を、神さまは必ず聞いてくださるのでしょう。

(6月15日)「詩編 71 : 1～9」

老いの日にも見放さず わたしに力が尽きても捨て去らないでください。
(詩編 71 編 9 節)

・「老人の嘆願と賛美」：救いを求める祈りです。この詩編の 9 節と 18 節に「古い」や「白髪」という言葉が出てくるので「老人の嘆願」とされますが、内容的にはキリストの受難にも結びつけられています。復活前火曜日にこの詩編は用いられます。

・わたしたち人間は、みんな年を取ります。そのスピードに違いはあるかもしれませんが、わたしも「古い」を感じるがよくあります。走ったらすぐに息が切れるし、お昼ご飯を食べると眠くなります。そして朝は、ものすごく早く目が覚めます。

・聖書は「古い」を、「弱さ」と結び付けます。しかし弱いからこそ、神さまに頼ることができるのです。神さまにのみ信頼をおき、すべてを委ねて歩んでいく。その喜びに気づかされるのが、「古い」なのかもしれません。

(6月16日)「詩編 71 : 10～15」

わたしの口は恵みの御業を 御救いを絶えることなく語り なお、決して語り尽くすことはできません。
(詩編 71 編 15 節)

・今日の箇所の前半で作者は、神さまに見捨てられたと思っていたのかもしれませんが、神さまと一緒に歩いていてくれていると思っていたら、そうではないような気がした。わたしたちにもよくあることです。

・マーガレット・F・パワーズが書いた「あしあと (Footprints)」という詩をご存知でしょうか。ある人が夢の中で今までの人生の歩みを見たときに、いつもは自分と神さまの二組の足跡があったのに、一番苦しかったときだけ足跡が一組しかなかったそうです。

・そのことを神さまに訴えると、こう答えが返ってきます。「あしあとが一つだったとき、私はあなたを背負って歩いていた」と。わたしたちは人生の中で、何度も神さまを見失います。しかしそのようなときには、神さまはわたしたちをおぶってくださっているのです。